

# イエイツ「動揺」について (I)

—〈存在〉から遥か離れて—

小堀隆司

## (一)

生の拠って立つべき位置と採るべき方位を模索してイエイツは、詩「動揺」<sup>(1)</sup>「Vacillation」のなかで、凡そ拭いきれぬ二律背反に決着をつけようとしている。彼の模索した生の方位とは、たとえば両極端に走る生の極端化、その狭間で弁証法的に案出された生の理想化を選び択る。全く対照的な風景を描いてそこに極端なまでに対蹠的な生を映し出したり、両者を融合して理想的な生を創り出すイエイツは、果してこのような生の方位を改めて突きつけることによって二律背反への決着を果そうとするのか。それとも様々な方位を掲げることと逆に方位よりも、むしろ両極の狭間に位置する生の必然をこそ説いて決着しようとするのか。もとより、こうした問題は、イエイツの追求してきた生と〈存在〉を巡ってすでに他の詩作品にも浸透している。

対蹠的な生や理想的な生という方位も、あるいは両極の間に依拠する生の位置も、もとをたどれば、すべて二律背反が採らせ、そして立たせたものである。だとすれば、次のような可能性が当然考えられよう。生の極端化はもう一方の極端化によってその方位を曖昧にさせられてしまう。生の理想化は、その過程において必要とされた矛盾・対立

する対極によって、再び分裂した状況へと自らを解体してしまう。拭いきれぬ二律背反への決着はその解消や否定によって、つまり新たな生の方位や位置を掲げることによって果されるわけではない。どちらとも正否を決めかねて両極の間を揺れ動くことに、然るべき生の一端を垣間見たとき、そのとき詩人は動揺するという姿勢にこそ、二律背反への決着を果そうとするのである。動揺への意志が二律背反に対するひとつの決着となるのだということに詩人は思い至るのである。それは二律背反を手懐けて生の根本的な形式として捉えようとする逆説的な決着といえよう。

二律背反への決着と呼応するかのように、二元論的構図に基づく世界のなかで生と〈存在〉への決着をいかにつけるべきかを、その境涯に互ってイエイツは主要なテーマとしてきたが、完璧な生の様態を象徴化したものに「存在の統一」がまず第一に挙げられる。概ねそれは俗から聖への、あるいは時間から永遠への超出によって可能とされる。かつてイエイツは「ビザンチウムへの船出」‘Sailing to Byzantium’において、聖と俗、青年と老年といった二律背反の分裂した渦中を逃れようとして、生々しい生の世界から老人に適しい聖なる都へと赴いた。そしてついに「存在の統一」を具現したと見られる「ビザンチウム」‘Byzantium’で、俗なるものごとごとく破碎する都の聖性を讃えた。また、これとは逆に「自我と魂の対話」‘A Dialogue of Self and Soul’に至っては、「存在の統一」や救済さるべき生の浄化を希う「魂」よりも罪深き生の卑俗さを生きようとする「自我」を称揚した。だが、そこには大きな反転が待ち受けていることも忘れてはならない。辿り着いた聖なる都は俗なるものを、また俗世に生きようとする「自我」は聖性を崇める「魂」をアイロニカルにも必要としたのである。

二項対立の図式は果して彼にどちらの世界へその眼差しを向けさせたのかという難問ズボリアに対して、聖の側であると見做したり、その反対であると判断するのはイエイツ詩はもとより生と〈存在〉そのものに眼を塞いでしまう行為となりかねない。「存在の統一」を夢見て聖なる都へ向うにしても、あの俗なる「溝」を生を根拠としても、純粹にそれ自体で自律し得るわけではない。必ずや、そこには対極をなすもう一方の極が見え隠れしている。

「動揺」という詩もその例外ではない。ただし、この場合には先の二篇の詩とちがって、タイトルが物語っているように一方に加担するかに見えて、実はどちらとも決めかねているところに「動揺」の最も重要なテーマがこめられている。たとえばこの詩の語り手が救済への希いを拒絶することに自分の採るべき生を見出そうとするとき、拒絶しようとするほど、逆に救済への希いがますます意識から離れなくなる。そうして彼は決断を鈍らせてしまうのである。選択しようとする決意に、決意それ自体を揺るがしてしまう迷いがなおも燻っているとき、事態はどう変化するのか。意識の射程に取り込んだ両極端な生の方位に衝き動かされながら、どちらか決着を迫られ、そしてまさに決着をつけようとする瞬間にあって、燻っている迷いはそうした決定的な瞬間を完全に留保してしまう心の躊躇ためらいへと変化する。両極の惹起した躊躇う心の動揺は、不安とともに詩人を自閉させてしまうのだろうか。決してそうではなく、生の原基として詩人の生に強く打ち据えられるのである。

生の原基として容認さるべき両極における揺れとは、もちろん、あれかこれかと不安の裡を彷徨よう内面の揺れを物語ってはいる。しかし、このような負性を帯びた生の〈動揺〉は、〈動揺〉そのものを方法化して実存形態のひとつに組み込もうとする詩人の、〈存在〉への途の絶えざる執念によって生への確信に変貌を遂げるのである。救済への希いにしろ、その拒絶にしろ、選択したその方位に対極の要素が潜在しているということ、それは、たとえば心の動揺を誘発したにしても、〈存在〉に肉迫する生の誕生を予兆しているといえるかもしれない。ともあれ、動揺を、いふならば方法的懷疑として逆説的な実存に仕立てあげることが、〈存在〉から遠く離れてあることを意味する。

## (二)

全体を八部で構成する「動揺」は、各部ごとにそれぞれ趣きを変えて二律背反の状況とそれに反応する心の有様を描き出している。まず第一部を見てみると、冒頭から二律背反が神話的な構造として確立されており、そして確立さ

れた構造に対してはある方位を指してそれに応じている。

Between extremities

Man runs his course;

A brand, or flaming breath,

Comes to destroy

All those antinomies

Of day and night;

The body calls it death,

The heart remorse.

But if these be right

What is joy ?

イエイツ「動揺」について (I)

両極の間にあつて

ひとは自分の途を走ってゆく。

焰が、あるいは燃え立つ息が

昼と夜の

二律背反をすべて

壊しにやってくる。

肉体はそれを死と呼び、

心は後悔と呼ぶ。

だが、本当にそうであるとしたら

喜びとは、何なのか。

(I部、1-10行)

「両極の間にあって／人間は自分の途を走り抜く」という二律背反を基盤に据えた生の根本的な様態が、揺るぎない事実として詩の冒頭に掲げられているが、それはまた主調低音となって全体にまで響き渡ってもある。この事実を前にして採る態度とは、どのようなものかといえ、あれかこれかと単に二者択一を迫ったり、両極の融合を期する方位へ赴くといった姿勢は見せずに、両極ともに無へと帰することと生を完成に導こうとする逆説的な姿勢をとって見せる。「昼と夜の二律背反」を焼き尽くして浄化されるべき生の完成を遂げることが出来る「焰」もしくは「燃え立つ息」とは、まさに詩「ビザンチウム」で謳いあげたあの「焰」を彷彿とさせる。現実における二律背反を「破壊」して生の完成を創造するという方位、換言すれば、浄化され救済さるべき地平を憧憬するという志向は、凡そ拭うことのできない二律背反の事実性と対照を成してはいるものの、これもまた必然的な行為として、さらには厳然たる事実として見做すことができよう。しかし、救済の地平への憧憬がこめられた志向は、現実の次元、すなわち「肉体」から見れば紛れもなく「死」そのものとして映るであろう。「肉体」が「死」と受け止めたこの志向は、また「心」の側からすれば、「後悔」以外の何ものでもない。

二律背反の「破壊」を「死」として実感する「肉体」といい、「後悔」としてしか感じられない「心」といい、いずれも自己否定的な負性を帯びた行為と受け取っている。その一方で、語り手の〈私〉は唐突にも「喜び」の在処

を問う。二律背反の「破壊」は、人間を救うことができるのか。「死」と「後悔」をもたらすだけだというならば、「喜び」のもたらされる余地なぞあるのか、むしろ「喜び」とは人間が救済されたときに初めて感じられるものではないのか。このように〈私〉は懐疑的に自らを問うのである。ところで「後悔」を孕んだ自己否定が成立つのならば、果して「喜び」に充ちた自己肯定は可能とされるのだろうか。ことによると、詩人は「喜び」の不在を人間に告知しているのかもしれない。二律背反の解消、つまり対立物の融合を実現したとき、そこに救済はもたらされるのか。また「喜び」は湧き出てくるのか。このような問題は「動揺」の掲げるテーマのひとつとなっている。

二律背反によって構築された生の根本的な様態を原理へと抽象して神話化した第一部の冒頭を受けて、第二部はその場所における両極端な生の様相を象徴化して描いている。

A tree there is that from its topmost bough  
Is half all glittering flame and half all green  
Abounding foliage moistened with the dew;

あそこに一本の樹がある、いちばん上の枝から  
半分は光輝く焰となり、もう半分は露にぬれた  
緑ゆたかな葉叢はむらをなす。

(Ⅱ部、1—3行)

「一本の樹」を象徴にして二律背反の原理を説明する詩人は、精神と生命の二つの要素をその「樹」に注ぎ込む。片

方は「光輝く焰」と化し、もう片方は「緑なす葉叢」と化して「一本の樹」は自らの〈存在〉を誇示するかのよう  
 大地に根づいている。内部に対立する要素を抱え込みながら、〈存在〉を体現している、と詩人の眼には映じた「一  
 本の樹」にあって、対立・矛盾を孕んでいること、別言すれば、それらを養分にして根を張りつつ成長しているこ  
 と、しかもこうした状態が分裂せずに維持されつづけていること、これを自然と見て彼はそのまま〈存在〉へと類推  
 しているかに思われる。

しかし、「一本の樹」と自分の内面には深い断層の隠されてあることを意識しないわけにはいかない。

And half is half and yet is all the scene;

And half and half consume what they renew,

半分は半分であるが、それで全景をなしている。

半分と半分は新たに創り出すものを焼き尽くしてしまう、

(Ⅱ部、4-5行)

「一本の樹」が示しているような、矛盾を含まない状態（「半分でもって全景をなす」ということ）、あるいは矛盾し  
 た両極をうまく融合させて調和が保たれている状態（「半分と半分は新たに創り出すものを焼き尽くしてしまう」と  
 いうこと）に、〈存在〉を見た詩人はさらにそれを人間の生と比較してみる。人間に至っては、「半分」は〈存在〉の  
 欠如態にすぎず、「半分」と「半分」によって蘇生されたものを「焼き尽くす」とは、自然の摂理に適ってはいるが、  
 人間からすれば〈破壊〉そのものにすぎない。相反するものを抱える人間は、「半分」だけではどうにもならず、か

とって合体すると、創造を破壊に至らしめてしまうだけで、「一本の樹」が象徴する〈存在〉からはほど遠い。

一方の極がそのまま全き〈存在〉となりおおせていること、矛盾した両極を抱えたまま〈存在〉としての調和を保っていること、それは外部としての自然、あるいは裸形としての自然だけが体现し得るものにほかならない。しかし、人間の生がそこに重ね合わされると、事態は一変した。欠如態としての生を晒け出したり、何かを創り出す両極が、創造された何かを破壊したりして、人間の生は〈存在〉を体现できない。詩人のもう一方の側から見たこの「樹」は内部としての自然の自家撞着、すなわち「一本の樹」が外部としてではなく、内面に強く意識された自然と化している。このように自然を意識の裡に造型して内面に巢食う生の疎隔を詩人は語るが、それは外部としての自然と内部としての自然における大きな相違を物語っている。

意識によって変容を蒙った「一本の樹」が内蔵する二つの構成物、「光輝く焰」と「緑なす葉叢」は、さらに「じつと凝視める激情」「that staring fury」と「盲目なる緑」「the blind lush leaf」によって代えられる。すると語り手は両極の間に「アティスの像」「Attis' image」という仮面を掲げる人物を登場させる。この人物は、第一部で歌われた、両極端の間を生きる人間を指していると思われるが、彼は二律背反という分裂した状態を修復すべく、そこに仮面を据えるのである。それが証拠に、「アティスの像」は神話的文脈によれば死と復活を司どる植物神とされている。この像が象徴するところのものは、思うに、二律背反への息苦しい認識が心の蕩遥から脱して辿り着きたいと希う、あるべき生（〈存在〉）なのではないだろうか。しかし、このことは、詩の文脈からすると認識に対する〈存在〉の優位を意味しているわけではない。ここにおいては、むしろその逆である。留意すべき点は、〈存在〉への志向が認識されるべきもの（生の二律背反性）を文字通りに認識の地平へともたらさず、また分裂ゆえの「哀しさ」をも人間に知らしめることがないというアイロニーにある。もちろん〈存在〉への志向は否定されこそしないが、その志向を抱えたがために認識の地平に立つことができないのだということ、語り手は銘記しようとするのではないだろう



か。二律背反から〈存在〉へ向う道行きよりも、むしろ二律背反における生の位置への認識そのものが、何よりも強く要請されているのである。

生における二律背反性の事実を受けて、両極に分化された生を具体的に描いたのが第三部である。そこに見られる両極はそれぞれ世俗的な生と脱俗的な生の位相を帯びている。両極の狭間に生きる人間に対して、語り手はどちらか一方の極に徹底すべきことを、命令口調で性急にも訴えかけているかのように感じられる。しかし詩人のその性急な訴えは、いずれが正しく、優位であるかを明かそうとはしない。むしろ、双方の生の有様ありようを象徴的に誇張しているにすぎないかのような印象を受ける。

Get all the gold and silver that you can,  
Satisfy ambition, animate

The trivial days and ram them with the sun,  
And yet upon these maxims meditate:

All women dote upon an idle man  
Although their children need a rich estate;

No man has ever lived that had enough  
Of children's gratitude or woman's love.

No longer in Lethean foliage caught  
Begin the preparation for your death

And from the fortieth winter by that thought  
Test every work of intellect or faith,  
And everything that your own hands have wrought,  
And call those works extravagance of breath  
That aer not suited for such men as come  
Proud, open-eyed and laughing to the tomb.

## イエイツ「動揺」について (I)

金や銀をありったけ手に入れろ、  
野望を満たせ、平凡な毎日に  
活気を与えて太陽を押し込め、  
だが、次のような名言には深く思いを巡らせ。  
女はみんな くだらぬ男に惚れ込むものだ  
子供たちは豊かな財産を欲しがるのに。  
子供の感謝や女の愛を  
十分に受けた男なんかいやしない。  
もはや忘却の葉叢にとらわれず  
死の準備をはじめろ  
四十の冬を迎えたなら そう考えて

知性や信念で築いた仕事を、

自らの手で削りあげたものをすべて吟味しろ、

そうして誇らしげに眼を見開いて笑いながら

墓場へと向うものたちに適しくない仕事は

呼吸の無駄遣いだといえ。

(Ⅲ部、1―16行)

「金や銀」に輝く財宝を俗世に求めて自分の「野望を満たせ」と促すように、卑俗なる欲望に走る生の姿勢と、それとは逆に、もはや世俗に縛られずに自分の「死の準備にとりかかれ」と訴えて完結を目ざす生の姿勢とを、詩人は突き付ける。それは二律背反に繋縛された人間に血路を見出させる契機として具体的に示されたものであろう。もちろん、そうした契機を全面的に否定し去ることはできないが、飽くまでもこの個所においては対立する生の極端化した姿を描くことそれ自体に重きが置かれていないだろうか。二項対立における優位性が重要なのではなく、両極端な生のあいだを揺れ動くという生の振幅の度合が大切なのである。このことは次の第四部で明らかにされるであろうが、第三部にもその予兆が感じられないことはない。たとえば、欲望の限りを尽くす世俗的な生に対して、「瞑想」を巡らす機会を持つようにと語り手が忠告するとき、すでにその足元は崩れかけている。「子供の感謝」や「女の愛」を存分に受けた男なぞこの世に見当りはしないし、「くだらぬ男」に「子供」は豊かな生活を望み「女」はついに惚れ込んでしまうものだと、こう詩人は俗世の無意味を語る。しかし、だからといって、世俗に背を向けて意味のある生を生きよと訴えているわけではない。たとえ無意味だとしても、こうした俗世における生を世の常として、つまり紛れもない事実として「瞑想」の裡に受け容れるべきことが伝えられているのだ。生の何たるかを忘却した世俗的な

生（「忘却の葉叢」）といえども、俗世における意味のない虚しさという事実からは眼を逸らしてはならない。こう語りかける詩人の口吻は悪態をついているようでいて、些か倫理的な色合いをも帯びている。だが、それ以上に重要なのは、彼の訴えには深い動揺を誘う火種が播かれているということである。

こうして動揺の可能性を宿したまま、詩人は反対の極へ急ぐかのようにしてさらに語りかける。つまり、世俗を脱して、自分の為した過去の行為を審判にかけながら、「死の準備にとりかかれ」と命ずるのである。「死の準備」とは、自身の過去を回想すること、その過去をあるべき生（存在）に照準を充てて過去の意味をいまここに問うて白日のもとに晒すことを暗示している。迦行的な生を生きるようにと訴える詩人は、しかしながら、訴えかけたその人間に向けてまたもや動揺を誘うような苦言を吐く。「死の準備」をするには、まずもって「誇らしげに笑いながら墓場に辿りつける」人間であらなければならないことが条件づけられるのだが、「誇らしげに笑う」素振りには少なくとも世俗を意識するがゆえのものと考えられよう。したがってそこには誠実さと嘲笑とそれを支える冷徹さが同時にこめられている。世俗に対する複雑な思いは、やがては動揺を引き込んでしまうという危険な必然性を孕んでいるにちがいない。死に赴くときにとる身振り、つまり「誇り」と「開いた眼」と「笑い」は、このように現実へ向けられたものと受け取れるが、もちろん死に向けるべき身振りでもある。結局、詩人は何を訴えたいのかといえば、生と死に向けた複雑な身振りをしながら、「墓場」へと赴くことによって生の完結（死）を見るといふ道程から、遠く離れて別の途を行く生は、「飛躍することのない無為な営みをしているだけで、単なる「呼吸の無駄遣い」として非難されるべきものだということを訴えたいのである。

生における二律背反を巡ってイエイツは、このように第一部でその原理的な構造とそれへの反応を披露し、第二部では「一本の樹」を象徴にして二律背反を蔵した自然と人間の有様を語り、さらに第三部に至っては現実における両極端な生を寓意化した。この時点でまずは心に留めておきたいことは、二律背反の事実性を肯定する詩人はそのどち

らに加担するわけでもなく、ひたすら生の振り子を右に左に大きく揺らせてみせただけでだということである。  
 心の揺れは次の第四部で決定的な局面を迎えるに至る。聖と俗に極端化された両極の生を思い描くとき、そこには俄に転機が訪れる。生の振幅の烈しき、というよりもむしろ二つの生の極端化が逆にあれか、これかの選択を中断させて突如としてある啓示が舞い込んでくる。雷に打たれるかのように啓示を受けたのは街の雑踏のなかに独り佇んでいるときであった。そしてその啓示を弾機にして新たな生が詩人の胸裡しゅつたいに出来する。

My fiftieth year had come and gone,  
 I sat, a solitary man,  
 In a crowded London shop,  
 An open book and empty cup  
 On the marble table-top.  
 While on the shop and street I gazed  
 My body of a sudden blazed;  
 And twenty minutes more or less  
 It seemed, so great my happiness,  
 That I was blessed and could bless.

私の五十年目の年が来てすぎ去った、  
 孤独の人となって私は、

混み合ったロンドンの店に座っていた、

大理石のテーブルに

読みかけの本と飲みほしたカップを置いたまま。

店や通りをじっと見ていると

とつぜん私の身体がかつと燃えあがった。

そうして二十分かそれくらい

幸せな気持ちが高まってきて

自分は祝福されており、そして人にも祝福を与えることができるのだと思えた。

(IV部、1-10行)

混み合ったカフェでそれぞれ思い思いの話題に夢中になっている客たち、カフェの前の通りを行き交うひとたち。こうした平穏で賑やかな日常の風景を、不安の揺らぎに独り佇む詩人の眼が捉えたとき、その風景は眩しいまでの啓示の光を放って詩人の眼のなかへと送り返される。「孤独の人」となってカフェのテーブルに就いている詩人からすれば、この啓示がいかなるものであるのか、それを知る術もないが、孤独と不安に揺れていた生がまるで自分の意志とは無関係に「幸福」な気分へと高揚したのは確かだ。さらには「祝福する私」と「祝福される私」とが同時に顕現されて、詩人は喪失したかに見えたあの「喜び」に浸るかのようになり、身内の熱を抱えたまましばし茫然となるのである。

二律背反に圧倒されて複雑に絡む鬱屈した思いがこのように拭い払われたとき、日常の風景の向こう側には新たな地平が拓けている。新たな地平とは、個々の生の拠って立つ在処をさらに支える基盤、いうならば生の根源的な深淵を指す。その深淵は具体的な生が依りどころとする根拠としてあるのではない。そこにおいては、あるひとつの確信

された生が絶対的に保証されることはない。常に渾沌として定まることを知らぬ変幻自在な生の、まさに生まれ出てくる底なき基底が垣間見られる。したがって、たとえば啓示に拠って立つ生、俗なるもの、もしくは聖なるものに拠って立つ生といったようにすべては相対的なものとして展開される。生の拠って立つ在処が、啓示や俗性や、あるいは聖性とされる場合、その在処を支える基盤は生を様々に生成する底なき基底に見出されるわけである。その基底から根源的な深淵へ、そしてその深淵から生の拠って立つ位置（＝在処）へと地歩を固めて初めてひとつの生が誕生する。ひとつの生はその位置に依拠するのであって、決して位置を支える基盤、つまり根源的な深淵に依拠するとはできない。またその保証もない。底なき基底に内包された生の根源的な深淵は、ある見方からすれば、様々な生を変幻自在に映し出す心の動揺そのものを物語っているといえよう。啓示を受けて「祝福された」はずの「私」から、やがては「幸せ」な気分と「祝福された」状態が消え去るのも必然である。その点に関してP・フォークナーは‘seemed’ という言辞を用いて「祝福された」状態が語られているところに真実味の有無を問うているが、その指摘は注目に値する。<sup>(2)</sup>まさに真実味を希薄にしてしまうこの‘seemed’は、啓示からその対極へ向かわせる動揺が無意識の裡に選び択った言葉である。

両極の間を涉ってゆく生には、「私は祝福され、かつ祝福することができ」という啓示の瞬間があったならば、その一方では決して解放を許さず自身を幽閉して問責するという倫理的な側面もまた可能性として考えられよう。そのことを証し立てしているのが、すなわち第五部である。啓示がその対極にある倫理的な吐責を呼び込んで詩人はまた新たに動揺する。第五部は自身を吐責する口振りでもってこう始められる。

Although the summer sunlight gild

Cloudy leafage of the sky,

Or wintry moonlight sink the field  
 In storm-scattered intricacy,  
 I cannot look thereon,  
 Responsibility so weighs me down.

夏の陽射しは空にゆらめく

雲のような葉叢を金色に染め、

冬の月明りは野原を

嵐で散乱した錯綜のなかへ沈めるが、

それを眺めることは私にはできない。

責任がそれほど重く私のうえに圧しかぶさるのだ。

(V部、1―6)

指摘するまでもなく、ここでも対照的な風景が描かれている。「夏の陽射し」に輝く「葉叢」と、「冬の月明り」に沈む荒涼とした「野原」とは、それを眺める詩人の心象に正反対のものとして映し出される。実際、同時には見ることでできないこの二つの風景は、したがって排他的なまでに極端化された二律背反をもたらしている。雑踏のなかの詩人が受けた啓示の瞬間とはちがって、明と暗にはっきり分かれたこれらの風景に視線を注ぐ彼の内面は重苦しく屈折した思いを抱え込んでいる。明とは、引用した個所に窺えるように生命の限りを尽くした生そのものの世界を示し、暗とは生命と無縁の荒涼とした空無なる世界を、生に対する死を暗示する。一方のものにだけ偏向することへの嫌悪、



徹底して二極分化された二つの世界への不快感というべきか、詩人はそうした状況に耐えかねている。そうして「責任」という言葉が彼の思いを「押し潰す」ほどに幅をきかす。極端化された二つの世界に対峙することができないのであれば、果してどのような位置に立てばいいのか。先走っていうならば、ひとつの極に偏することなく必ずその裡に反対の要素を取り込むような地平こそ、いまや詩人の位置すべき場所となるのであろうか。

それぞれ明と暗を湛えた風景に触発されて吐かれた「責任」という言葉は、自身の立居振舞いに関して投げられるが、そこでもまた二律背反の分裂が新たに起こる。

Things said or done long years ago,

Or things I did not do or say

But thought that I might say or do,

Weigh me down, and not a day

But something is recalled,

My conscience or my vanity appalled.

その昔に言ったり行なったりしたことが、

あるいは行なったり言ったりはしなかったけれど、

言ってもいいだろう、してもいいだろうと思っただことが、

私を押し潰すのだ。一日たりとも

何かが想い返されない日はない、

私の良心や虚栄心がぞっとしてたじろがない日はない。

(V部、7—12行)

眼前の風景と照応するかのように、彼の内面は、実際にとった言動と、実現こそしなかったが心の裡で巡らされた言動とが対立したまま、凡そ調停の効かない二律背反を再び産み落としている。そこに身を置きながら、彼は自分の過去を問いたただすのである。過去における実際の事実と架空の事実との間を意識は行ったり来たりする。実際に為した行為とは別に、ああしても良かったのではないかと思ひ巡らす架空の行為が浮かび上がって詩人の過去の行為への思ひは、それを否定的に見るかのようには後悔と「責任」で「押し潰され」そうである。この二律背反の状態は、「責任」によって窒息させられた彼を出口の見当たらない隘路へと追いやってしまうのである。揚句の果てには、理念を求める「良心」も欲望に盲目となった「虚栄心」も、收拾のつかない二律背反に「愕然」としてなす術もない。それにしても二律背反の状態に「愕然」となった「良心」と「虚栄心」が、またも心の二律背反を表しているのは不思議なことであると同時に何かを予兆させるようでもある。「孤独の人」となって佇んだ街の雑踏が、あるいは雑踏のなかの孤独が詩人の胸裡に顕現せしめたあの啓示から、遙かに逸れて息苦しくも自身の過去を問責して再び引き裂かれてあるということとは、どういうことなのか。また、この分裂は修復されるのか、それとも癒されないのか。癒されるとしたならば、そのとき、より高次の生に辿り着くことができるのであろうか。引き裂かれて孤独な詩人に心の宥和をもたらした啓示と、詩人を再び分裂へと追いやった「責任」は、もとよりその底流に二律背反性という生の難問を共有している。底流とはまた、あの生の根源的な深淵でもある。啓示と「責任」とは、同一の地平(根源的な深淵)にあって矛盾し渾沌とした生の有様がひとつの生の形式(依拠すべき位置)として造りあげたものである。つまり、そうした生の形式においては措定された啓示は必然的に「責任」が反措定されることによって否定されなければなら

らない。とすると、この「責任」もまたそれと矛盾・対立する要素を反措定することで打ち消されるのは必定であろう。

第四部はその直前の第三部で描かれた背反する生の有様に応えて、それを受容しようとする生の、いわば親和としての啓示を歌ったが、次の第五部では二律背反に対して決して心の宥和を許さぬ自己閉塞ともいうべき「責任」が前面に打ち出された。二律背反とは、思うに、一方で自らを否定しつつその裡に新たに敵対する極を生み出すという尽きることのない無限の運動をするところに、二律背反という生の本質的な形式があるのだ。別言すれば、動揺（たとえば啓示から「責任」への振幅）が活かされるために要請される生の先験的な形式なのである。またイエイツは『幻想録』A Vision に収められてある「マイケル・ロバーツとその友人たちの物語」*Stories of Michael Robartes and His Friends* で、カントの提唱したいわゆる純粹理性の二律背反に触れてロバーツにこう語らせている。

「私はイマニュエル・カントの第三の二律背反性<sup>アンチノミイ</sup>、つまり自由という定立<sup>テーゼ</sup>と必然という反定立<sup>アンチテーゼ</sup>に辿り着いた。しかし私はそれをこう言い直す。人間のあらゆる行為は、魂の究極にして特異な自由と魂の神における消滅とを表している。すなわち実在とは、様々な存在物の集積であると同時に唯一の存在であることを表している。このような二律背反は思考の形式が我々に附与した現象ではなく、その状況によって渦巻となったり苦汁となったりする生そのものである。<sup>(3)</sup>

特に注目すべき点は最後の件りにある。イエイツは二律背反性を「思考の形式」（＝理性）によってもたらされた「現象」とは見做さずに、「生」として捉えている。理性や思考による認識能力が構成した枠組ではなく、凡そ二律背反とは、「渦巻」（たとえば心の混乱や動揺）や「苦汁」を帯びた生それ自体がすでに内部で形づくっている状態であ

るのだと、そうイエイツはいいたいのではないだろうか。知の遠近法で捉えた静的な枠組よりも、絶えず変化する生の内部として表象された動的な様態に二律背反を感知する詩人は、「苦汁」に充ちた「責任」からその対極へと生を変容させるであろう。

「責任」が詩人の「良心」と「虚栄心」を「愕然」とさせて再び二律背反のなかへ引き戻すとき、彼はその「責任」に対してどのような反応を示すのだろうか。二律背反に対する心の宥和と幾らか似て、否定と肯定が混然一体となつたまま、さながら悟達したかのような境地に詩人は立つのである。それはまた、ありとあらゆる生の形態の撥無と受容を同時に宣誓するというニヒリスティックな姿勢を採る位置へと詩人を向わせてもいる。二律背反の彼岸を物語っているといえるこの位置は、第六部において三人の人物が異口同音に唱える言葉に反映されている。

A rivery field spread out below,

An odour of the new-mown hay

In his nostrils, the great lord of Chou

Cried, casting off the mountain snow,

'Let all things pass away.'

川のようになだらかな野が眼下に拡がっていた、

刈りたての干し草の匂いが

鼻を突き、周の大公は

山の雪を払い落してこう叫んだ、

「すべて過ぎゆくがままにしておけ」

(VI部、1—5行)

まず「周の大公」が「山に降る雪」をまるで世俗の塵のように払い落しながら、もはや二律背反に動揺することも分裂することもなく悠然とした態度で臨む。「川のようになだらかな野」にしる「刈りたての干草の匂い」にしる、いずれも明と暗に分かれた自然を捨象した、いわば無垢としての自然を彼は前にしている。この自然は悠然と構える彼の態度とうまく照応している。次に登場する「征服者」‘some conqueror’は「戦いに疲れた部下たち」‘battle-weary men’に向って戦おうとする意志を捨てると促すかのごとく、「すべて過ぎゆくがままにしておけ」と同じ言葉をつく。ここでは敵と味方、支配者と配下における二律背反を断ち切ることが問題とされている。そして詩人自身と思われる三番目の人物は次のような状況のなかで同じ台詞を吐く。

From man's blood-sodden heart are sprung

Those branches of the night and day

Where the gaudy moon is hung.

What's the meaning of all song?

'Let all things pass away.'

血塗れになった人間の心臓から

夜と昼の枝が生える、

そこには けばけばしく光る月がかけられている。  
歌なんてどれほどの意味があるのか。

「すべて過ぎゆくがままにしておけ」

(VI部、11—15行)

二律背反としての「枝」が「血塗れになった人間の心臓」からはえ出るとは、換言すれば、対象物を対立の相のもとに見る意識は生の原基もしくは生の原初的な様態から発生するということになる。二律背反は、そうした生の原基からの必然的な所産であって、決して偶然の結果として生まれたのではない。また二律背反の発生する処では、あの「月」すら醜く「歌」すらもその価値を奪われてしまうほどに、すべてを渾沌とした根源に還元してしまう。賢者と英雄と、そして詩人は自身の生や外界をすべて無に帰してしまおうとして、「すべて過ぎゆくがままにしておけ」と言葉を発するが、そこにはまた、すべてを許そうとする意志も仄見える。何もかも無に至らしめると同時に、受け容れるというこの境位は、都会の雑踏で受けたあの第四部の啓示にすでに顕現されており、この第六部はその変奏と考えられよう。また、三人の吐いた言葉が「叫び」となって響き渡っていることを思い起こせば、こうした境位への確信はより強く感じられないだろうか。

すべてを無みすると同時に受容する境位とは、二律背反の彼岸を示しているとすでに述べたが、また生の究極的な地点をも指し示しているよう。二律背反の克服を成し遂げ、かくして詩人はまさに〈存在〉に辿り着こうとしている。いや、実際はそうではないのである。彼は辿り着こうとはしない。二律背反の惹き起す動揺のなかへと再び入り込むうとするのである。それが証拠に、第七部はまたも両極に引き裂かれた状況が描かれている。「自我と魂の対話」と同じ形式を採って、相対するものの生の方位が次のように示されている。

The Soul. Seek out reality, leave things that seem.  
 The Heart. What, be a singer born and lack a theme?  
 The Soul. Isaiah's coal, what more can man desire?  
 The Heart. Struck dumb in the simplicity of fire!  
 The Soul. Look on that fire, salvation walks within.  
 The Heart. What theme had Homer but original sin?

魂 真なるものを探し出せ、それらしいものは捨てよ。  
 心 なんだと、歌い手に生まれながら主題がないのか。  
 魂 イザヤの熱炭だ、それ以上ひとは何を望めようか。  
 心 混じり気のない焔に触れば口もきけなくなるぞ！  
 魂 あの焔を見よ、あのなかを救済が歩いている。  
 心 ホーマーには原罪のほかにはどんな主題があったのか。

(VII部、1-6行)

汚れなき純粹性を求める「魂」と罪深き生を歌にうたおうとする「心」は、全く逆の地点に辿り着こうとしているが、その語り口が殆んど命令と疑問の形を採っているところこそこの道行きの困難さが予感される。また「魂」と「心」を一個の人間が宿したものと想定すると、さらにいっそう困難さが感じられよう。表層的な現象でなく、唯一絶対の「実在」こそ真なるものと信じて疑わぬこと、ここに「魂」の〈存在〉の証しが見られる。汚れた生を「焔」

のなかで焼き尽くすことによって「救済」されるのを望む「魂」とは、浄化の「焰」を起こす「イザヤの熱炭」を希求するように、キリスト教徒であることが解る。一方の「心」は「焰の単純さ」のなかで浄化され救済されることに、麻痺されて空洞化した生を看取する。「心」とは、「ホーマー」に倣って「原罪」をこそ歌のテーマにうたうことを希っているように、反キリスト教徒であることが解る。あるいは「実在」を信ずる「魂」と、純粹な単一性を忌み嫌う「心」との関係は、近代と反近代のそれと見做すこともできよう。それにしても、相反する生を交錯させるべき弁証法的対話はその期待を裏切って単なるモノローグに墮してしまい、新たに生の地平が誕生する機運を窺うことはできない。このようにダイアローグを通してさえも、双方はそれぞれの生に固執して自らを告白するモノローグを演ずるだけで、再び二律背反の状況が前面に打ち出されてしまう。

引き裂かれた状態を経験するとき、二極分化の徹底した二律背反はその極端な徹底化によって自らを解体するといった逆転劇を演ずるに至る。たとえば、それは第四、第六部に見られたように、啓示とニヒリスティックな態度とになって演じられた。とすれば、次の第八部でも当然、逆転劇は期待されるであろう。こうして第八部を最後に歌って詩人はこの詩を終える。まずは、前半はこう始まる。

Must we part, Von Hügel, though much alike, for we

Accept the miracles of the saints and honour sanctity ?

The body of Saint Teresa lies undecayed in tomb,

Bathed in miraculous oil, sweet odours from it come,

Healing from its lettered slab. Those self-same hands perchance

Eternalised the body of a modern saint that once



Had scooped out Pharaoh's mummy.

フォン・ヒューゲルよ、私たちは別れねばなるまいか、

聖者の奇蹟を認め神聖さを崇める私たちはよく似ているというのに。

聖女テレサの遺体は腐りもしないで墓に眠り、

奇蹟の油に浸されてその墓からは芳香が漂う、

文字に刻まれた石板で病は癒される。かつてファラオのミイラを

掘り出したのと、たぶん同じ手が

近代の聖者の遺体を永遠にしたのであろう。

(Ⅶ部、117行)

「私たちは別れねばなるまいか」といきなり結論づける語り手は、第七部で登場した「心」に相当し、「フォン・ヒューゲル」とは「魂」に相当するのはいうまでもない。ここで興味深いのは、相容れぬ対話を行なった二人が「かなり似ている」と語り手が指摘する点である。「聖者の奇蹟」と「神聖さ」を決して疑わぬ二人だが、それにしても、どうして「訣別」しなければならないのか。「聖女テレサ」の死体が腐ることなく「芳香」を漂わせていることも、「同じ手」が「聖者」を「永遠」にしたことも、ともに堅く信ずる「私たち」には、にも拘らずたったひとつ袂を分かつ点が、しかも決定的な相違がある。

こうして相手の「フォン・ヒューゲル」に向って、彼とはちがう生の拠って立つ在処を仄めかした語り手は、さらに後半部で立つべきその位置を表明して訣別への意志を強める。

..... I —— though heart might find relief

Did I become a Christian man and choose for my belief

What seems most welcome in the tomb —— play a predestined part.

Homer is my example and his unchristened heart.

The lion and the honeycomb, what has Scripture said ?

So get you gone, Von Hügel, though with blessings on your head.

.....。私は——もしもキリスト教徒となり

墓のなかで一番歓迎されるようなものを信じ込んでしまえば

心は救われもしようが——予め運命づけられた役割を演ずるのだ、

ホームーこそ私の手本である、洗礼を受けない彼の心が。

ライオンと蜜蜂の巣について、聖書はなんと知っているか。

もはや立ち去れ、フォン・ヒューゲルよ、おまえの頭上に祝福のあることを

希いはするが。

(Ⅷ部、7—12行)

「奇蹟」や「聖性」を信ずる「私」は、第七部での対話が示したように、「キリスト教徒」でなく「予め運命づけられた役割」を演じて、つまり救済を望まぬ罪深き生を背負って「歌」に生きようとするものである。その宿命を受け容れるべき「私」は、救われるべき「キリスト教徒」から遠く離れて、「洗礼を受けていない心」を持つあの「ホー

「私」を手本に錯綜した現実を生きようと決意する。両極の一方（キリスト教）を捨象してひとつの極に固執する生は、「一本の樹」について歌った第二部の一節「半分は半分であるが、それは全景をなしている」を想起させはしないだろうか。語り手の「私」がゆき着こうとする生には、この「半分」としての〈存在〉の完璧さが備わっていると見えないうか。そうであるとすれば、「フォン・ヒューゲル」に向って「頭のうえに祝福を受けて」救済の道を行くようにと語って送り出す「私」は、少なくとも自分に限ってはそのような救済への道を拒絶していると考えられるが、しかしそのとき、すでに自身の裡に深い動揺を惹き起こしているにちがいない。動揺する「私」は、「半分」としての〈存在〉に辿ろうとすることなどできるはずもないのだ。「別れねばなるまいか」と疑問に附し、「立ち去れ」と命令を下す、こうした口吻でしか拒絶の姿勢を示せない「私」の動揺はもはや隠しきれない。

モノローグともいふべき対話（第七部）が呼び込んだ二律背反を前にして、果して期待された逆転劇は第八部で起こったのであろうか。「フォン・ヒューゲル」と訣別して罪深い卑俗な生を生きようとする「私」は、その決意もすぐさま揺らぎ、さらには啓示を受けたりニヒリスティックな境位に立つといった飛躍もないままに立ち尽くしている。第四部や第六部で見たような逆転劇は、もはや「私」には叶わぬことである。かくして最後に大きく動揺する「私」は、救済への拒絶と「フォン・ヒューゲル」の生に対する受容との間を揺れ動く自身を晒け出すに至る。両極の間を再び揺れ動いて「私」は、さて、どこへ生の方位を向けているのだろうか。〈存在〉から遙か離れてただ虚空を仰いだまま立ち尽くしているだけであろうか。また、あの「喜び」はついにもたらされることはないのだろうか。期待された逆転劇とは、実は、イエイツ詩に特有のアンチ・クライマックスとなって〈動揺〉の裡に秘んでいるのである。

## 〈注〉

- (1) W. B. Yeats; *Collected Poems of W. B. Yeats*, (London, Macmillan, 1977) 五五五頁以下を参照。  
 (2) Peter Faulkner; *Yeats: Open Guides to Literature*, (Milton Keynes, Open Univ. Press, 1987) p.80.  
 (3) W. B. Yeats; *A Vision*, (London, Macmillan, 1962) p.52.